第164回やすらぎの会通信

令和5年11月18日実施

皆さん、いかがお過ごしでしょうか。山代表が入院療養中ということで、11月の学習会には、そのことを心配された方が多く参加され、心より感謝申し上げます。12月の学習会は、16日（土）13時よりいつもの白山市出城公民館で開催されます。12月も多くの方のご参加をお待ちしております。会場には自販機がないため、お飲み物をご持参下さい。

【中学生の事例】

中学生の息子が、急に学校へ行けなくなり、しばらくすると自分の部屋から出て来なくなりました。今では食事も自分の部屋で取り、家族と顔も合わせません。そのせいで、家庭内は暗く、家族の会話が減っています。どうしたらいいのでしょうか。

不登校の子どもが、初期の段階で部屋に鍵をかけてひきこもることは、極めてまれです。そうなるまでには、それ相応の心理状況と、子どもを取り巻く環境が影響を及ぼしているはずです。不登校の原因を探して家族で言い争ったり、不登校が原因で家族の会話が減ったりして、家族全体が大きく落ち込むと、家族をそのようにしてしまった自分自身を追い詰めて、自分の部屋に引きこもってしまうことがあります。

親への反抗、いやがらせ、登校させられることへの抵抗などへの手段として、ひきこもることもあります。親は何らかの形で子どもを責めたり干渉したり、子どもを否定する言動をしている可能性があります。そんな親の重圧が、子どもを追い詰めることになります。さらに、不登校になる子どもは対人関係が苦手な場合が多く、直接的・間接的に気になる人との関りから身を守ろうとして、ひきこもることもあります。

大切なことは、少しずつ心の鍵を外していくことです。そのためには、まず子どもの状態を理解します。ひきこもっている子どもは、人との関りを拒絶しているようですが、その内面には、「関わりたい、関わってほしい、そして援助してほしい」という気持ちが潜んでいます。こうした矛盾した両面の難しい気持ちに働きかけてこそ、心を開いて信頼し合える状態が生まれます。子どもが感じている本当の気持ちを親が受け止めることから始めましょう。（高）

通信をご愛読の皆さん、今年の冬は暖冬ということですが、学校では集団風邪やインフルエンザが流行っていますね。健康管理には十分気をつけて、冬を乗り切りましょうね。先月号からは、やすらぎの会のアドバイザーを務める高が、自書の『不登校だっていいじゃないか』（アントレックス社、2016年）を少しずつ紹介しております。なお、通信の送付が必要でない方は、高（090-8265-3968）まで電話かショートメールでお願いします。

「子どもの人格形成をどう考えるか」

親には子どもの成長を見守り、応援していく役割もあります。例えば、子どもがしたいこと・やりたいものを見つけられるよう、その夢が叶うよう応援するのが親の役割です。特に自信を失っている、あるいは失いかけている子どもには、どんな些細なことでも、とにかくできたらほめてあげましょう。大切なことは、親の価値観や固定観念の押し付けをしないことです。まず、子どもの感じ方や物事のとらえ方を認めてあげることです。子どもにとっては、自分の存在を認められることを実感できると、精神的に成長できる条件が整うことにもなります。

不登校の子どもたちの多くは、自尊感情が低くなっているとよく言われます。自尊感情とは、「自分は、今のままの自分でいいのだという意識（感覚）」「今の自分に価値を認め、今の自分を良しとする考え方」のことです。自分のことを「嫌いだ」と考えている子どもが多いと言います。自尊感情が低いと自分に自信が持てず、前向きな考え方ができなくなります。いろいろなことを考えながら少しずつ大人になっていく子ども。そんな子どもが、自分のことを嫌いになってしまうなんて悲しいことですね。

不登校については、今後どうしたらいいのか、子ども本人の意見や考えを尊重しつつ、家族みんなで考えてほしいと思います。結果的に再登校できればいいのですが、もっと大切なことは、子どもの自主性や自立性が養われることです。そのためには、大人の考えを押し付けるのではなくて、親御さんも子どもと一緒になって真剣に考えてあげることが、子どもの人格形成にも大きな影響を与えると思われます。

信頼築く接し方助言

金沢学院大特任教授　高氏、学童保育で

津幡町学童保育指導員会の研修会「思春期の子どもとの接し方」（北國新聞社後援）は30日、同町清水の学童保育つばたっ子で開かれた。金沢学院大スポーツ科学部の高賢一特任教授が、思春期前期となる小学校高学年の心身の変化を解説しながら、大人はいつでも味方であると児童が思える信頼関係の築き方などをアドバイスした。

高氏は、高学年になると自立心と親の期待との間で板挟みになるほか、自分が公平に扱われているかなどの自尊感情が強まることを説明。その中で生じたストレスが反抗期につながるとし「いずれ治まるとおおらかにとらえ、受け流す姿勢が大切」と助言した。

筋が通っていない話でも最後まで聞くことや、大人の考えを押しつけず、子どもの気づきを促す問いかけの形でメッセージを伝えることが重要とした。

津幡町学童保育指導員会の研修会で、小学校高学年との接し方をアドバイスする金沢学院大の高特任教授＝津幡町庄の学童保育つばたっ子

（令和五年十月三十日　北國新聞朝刊）

子育てについて語る高特任教授

＝白山市北陽小

親子の意思疎通語る

白山・北陽小で高特任教授

金沢学院大の高賢一特任教授は2日、白山市北陽小で講演会「親から子への効果的な伝え方」（北國新聞社後援）を開き、より良い親子間の意思疎通について話した。

保護者を対象にした同校の非行・被害防止講座の一環で開かれた。高特任教授は人間の性格を三つに大別し、タイプに応じた言葉を選ぶことが重要だと説いた。